

そのあと、副鼻腔に薬を注入します。

【手術療法】

かつては、上唇の内側を切開して、炎症を起こしている副鼻腔の粘膜をすべて切除するという方法が行われていました。この手術法は歯肉にもメスを入れるため、歯や歯肉に悪影響を与えたり、顔のしびれや痛みなどの後遺症の恐れがあります。また、粘膜を根こそぎ除去してしまうので、正常な粘膜が再生するまでに非常に時間がかかり、その間は自浄機能がないので、細菌感染を起こしやすい状態になります。

しかし現在はこうした手術ではなく、内視鏡を用いた「内視鏡下鼻内手術」が主流になっています。自然孔を広げて、副鼻腔の換気をよくすることを目的としているので、炎症をすべて切除するのではなく、自然孔を塞いでいる粘膜だけを切り取ります。これによって、炎症を起こしている粘膜が正常な状態に回復するので早く治り、患者の身体的負担も軽くて済みます。

●内視鏡下鼻内手術

まず先端に小型カメラをつけた内視鏡を、鼻腔から副鼻腔に挿入します。そして内部の様子をモニターに映し出し、それを見ながら自然孔を覆っている粘膜を除去していきます。通常は両方の鼻を同時に行いますが、症状の程度によっては片方ずつ行うこともあります。

内視鏡下鼻内手術は、局所麻酔をかけて行うことも可能ですが、粘膜を切除したり膿を吸い出したりする音が耳に入っ

てしまうので、患者がそれを避けたいと希望する場合は、全身麻酔をかけて手術します。

●手術後の注意

慢性副鼻腔炎では、“手術と術後治療で半分ずつ治す”と言われているほど、手術後の治療が重要です。手術後は、止血や鼻・副鼻腔の清掃、細菌感染防止のための治療を行います。両方の鼻を手術した場合、10～14日程度の入院が必要となります。

退院後も粘膜の状態が安定するまでは、マクロライド系の抗生物質を内服したり、ネブライザー療法などを続けて行います。また、手術跡のかさぶたも処理しなくてはならないので、少なくとも手術後3ヶ月くらいまでは、定期的を受診して適切な処置を受けることが大切です。

予 防

副鼻腔炎を防ぐには、とにかく風邪をひかないことです。気温の変化に合わせて衣服を調節したり、寝冷えや湯冷めをしないように気をつけましょう。栄養バランスのとれた食事を心がけ、適度な運動をし、全身の抵抗力を鍛えることが基本です。そして風邪をひいてしまったら、完全に治しましょう。風邪をひいて鼻づまりが2週間以上治らない場合は、急性副鼻腔炎の恐れがあります。早めに医師の診察を受けて慢性化を防ぎましょう。副鼻腔炎は、いったん高度なものになると完治が難しいのが現実です。早期治療を心がけて、生活の質を健やかに保ちましょう。